3 GeV ERLの周回部の影響について(続き)

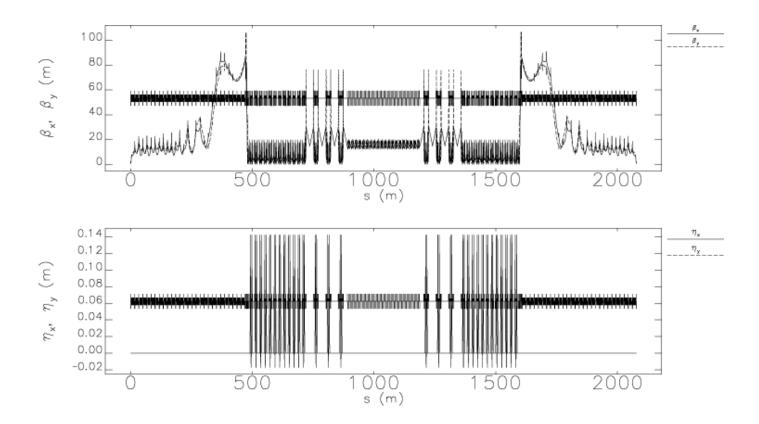
ビームダイナミクスWG 2012年7月26日(木)

加速器第7研究系 島田 美帆

検討項目

- 1. 放射励起によるエミッタンス増加・エネルギー広がり
- 2. CSR wakeによるエミッタンス増加・エネルギー広がり
- 3. 空洞の縦方向のwakeについて
- 4. 2つの運転モードについて
 - Ultimate mode: 77 pC, 2 ps, 0.1mm-mrad, σ_{δ} =2x10⁻³ (@10MeV)
 - XFELO (Case A): 20 pC, 1 ps, 0.1mm-mrad, σ_{δ} =2x10⁻³ (@10MeV)
 - XFELO (Case B): 7.7 pC, 0.38 ps, 0.1mm-mrad, σ_{δ} =2x10⁻³ (@10MeV)

現在のOptics



補足

- 3.5 GeV XFELOの可能性を考慮し、曲率半径20m(正確には19.1m)のままとした。
- CSRCSBENDのn_kicksを適切な値に変更した。(500 kicks / rad以上)
- アークにはCSRDRIFTを挿入した。
- 加速空洞にtesla型のwakeを導入した。

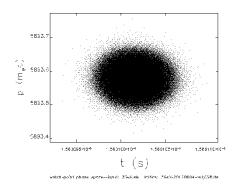
放射励起の影響について

解析解は第67回BDWGの中村さんの資料を参考。 トラッキング粒子数は100k CSRの影響を除くため、7.7 x 1e-20 Cとした。

RF curvatureの影響を除くため、RF周波数を1.3kHzとした。(右図→)

4通りの初期値で計算を行った。

- 1. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-20}, 2 \times 1\text{e-10})$
- 2. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-}20, 2 \times 1\text{e-}3)$
- 3. $(\epsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-}7, 2 \times 1\text{e-}10)$
- 4. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-}7, 2 \times 1\text{e-}3)$



RF curvatureはほとんど見えない。 (加速直後)

1. energy spread 增加 Δσ_δ

解析解:1.31 x 1e-5

トラッキングの解 $\Delta \sigma_{\delta} = \operatorname{sqrt}(\sigma_{\delta 1}^2 - \sigma_{\delta 2}^2)$ 、 $\sigma_{\delta 1}$:周回前, $\sigma_{\delta 2}$:周回後

- 1. $\Delta \sigma_{\delta}$ = 1.3 x 1e-5
- 2. $\Delta \sigma_{\delta}$ = 1.3 x 1e-5
- 3. $\Delta \sigma_{\delta}$ = 1.3 x 1e-5
- 4. Δ σ_δ = 1.3 x 1e-5

Δσ_δの解析解はトラッキングと一致した。

放射励起の影響について ||

6通りの初期値で計算を行った。

- 1. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-}20, 2 \times 1\text{e-}10)$
- 2. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-}20, 2 \times 1\text{e-}3)$
- 3. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-}7, 2 \times 1\text{e-}10)$
- 4. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-}7, 2 \times 1\text{e-}3)$
- 5. $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10MeV) = (1 \times 1e-6, 2 \times 1e-10)$
- 6. $(\epsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10\text{MeV}) = (1 \times 1\text{e-4}, 2 \times 1\text{e-10})$

2. emittance増加 Δε_xを2つの定義で比較

解析解: 2.6 x 1e-13 [mrad]

トラッキングの解 Δεx = sqrt $(ε_{x1}^2 - ε_{x2}^2)$

- 1. $\Delta ε_x = 2.6 \text{ x 1e-13 [mrad]}$
- 2. $\Delta ε_x = 2.6 \times 1e-13$ [mrad]
- 3. $\Delta ε_x = 2.9 \text{ x 1e-12 [mrad]}$
- 4. $\Delta \varepsilon_v = 2.9 \text{ x 1e-12 [mrad]}$
- 5. $\Delta ε_v = 8.5 \times 1e-12$ [mrad]
- 6. $\Delta \varepsilon_x$ = 5.5 x 1e-11 [mrad]

解析解: 2.6 x 1e-13 [mrad]

トラッキングの解 $\Delta \epsilon x = \epsilon_{x1} - \epsilon_{x2}$

- 1. $\Delta ε_x = 2.6 \text{ x 1e-13 [mrad]}$
- 2. Δ ε_x = 2.6 x 1e-13 [mrad]
- 3. $\Delta \varepsilon_x = 2.4 \text{ x 1e-13 [mrad]}$
- 4. $\Delta ε_x = 2.4 \text{ x 1e-13 [mrad]}$
- 5. $\Delta \varepsilon_{v}$ = 2.1 x 1e-13 [mrad]
- 6. $\Delta ε_x = 0.9 \text{ x 1e-13 [mrad]}$

 $\Delta \epsilon x = sqrt(\epsilon_{x1}^2 - \epsilon_{x2}^2)$ と定義したときは、 ϵ_x の初期値に大きく依存するが、 $\Delta \epsilon x = \epsilon_{x1} - \epsilon_{x2}$ では ϵ_x の初期値に関わらず、ほぼ一定で解析解に近い。

CSR wakeの影響について I

放射励起の影響を除くため、 $synch_rad=0$, ISR=0とした。 RF curvatureの影響を除くため、RF周波数を1.3kHzとした。 加速直後と減速直前の $\Delta \epsilon_x$ および $\Delta \sigma_\delta$, $\Delta \delta$ を計算した。

初期値: $(\varepsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10MeV, Q, \sigma_{z}) = (1 \times 1e-7, 2 \times 1e-3, 77pC, 2 ps)$ 直線部に流れるCSR wakeについて評価した。 遮蔽効果は考慮していない。

- 1. CSR wakeによるemittance増加 統計的な誤差以上の優位な $\Delta \epsilon_x$ はなかった。 $(\Delta \epsilon_x \sim \Delta \epsilon_v)$
- 2. CSR wakeによるenergy spread増加

 $\Delta \sigma_{\delta}$ CSRDRIFTなし: 9.1 x 1e-6 (0.66 x $10^{-5} \rightarrow 1.12$ x 1e-5) CSRDRIFTあり: 2.8 x 1e-5 (0.66 x $10^{-5} \rightarrow 2.87$ x 1e-5)

ΔΕ/Ε₀ (=Δδ) CSRDRIFTなし: - 1.4 x 1e-6 CSRDRIFTあり: - 3.8 x 1e-5

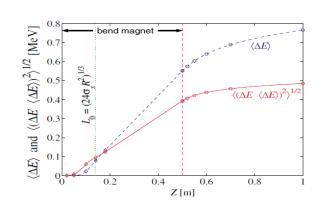


Figure 4: Energy loss (blue), $\langle \Delta E \rangle$, and rms energy spread (red), $\langle (\Delta E - \langle \Delta E \rangle)^2 \rangle^{1/2}$, along 50-cm bend magnet and its exit drift section. The diamonds are the locations corresponding to the curves in Fig. 1, while the circles are the locations corresponding to the curves in Fig. 2.

G. Stupakov-SlacPub 9242 (2002)

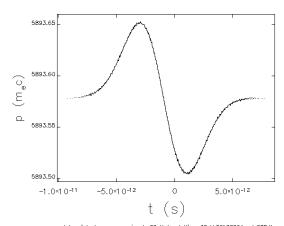
偏向電磁石後の直線部に流れる CSR wakeによる ΔE および $\Delta \sigma_{\delta}$

Transientの長さがL0 = 1.7mと、電磁石の長さ1mより長い。 \rightarrow 偏向電磁石中より、直線部に出た後のCSR wakeの影響が非常に大きい。 $\Delta\sigma_{\delta}$ は放射励起より大きいが、同程度である。

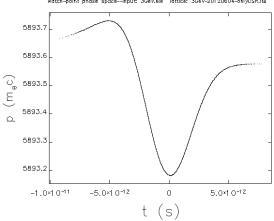
Transient 効果

周回後の縦方向の位相分布 初期値: (ε_{nx}, σ_δ@10MeV, Q, σ_z) = (1 x 1e-20, 2 x 1e-10, 77pC, 2 ps)

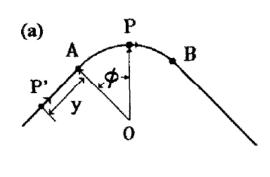
CSR DRIFTなし

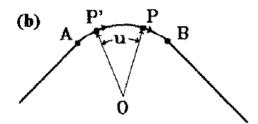


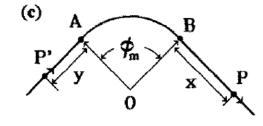
CSR DRIFTあり

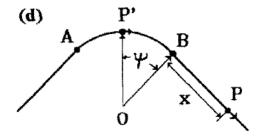


watch-point phase space--input: 3GeV.ele lattice: 3GeV-20120604-onlyCSR.lte





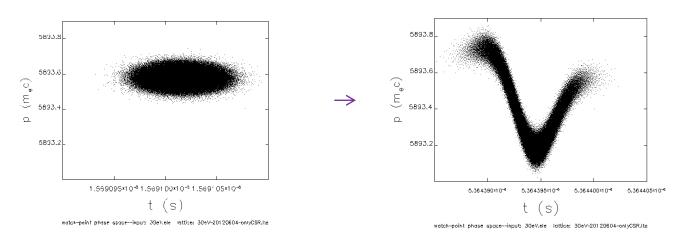




E.L. Saldin, NIM, 398, 373-94, 1997

CSR wakeの影響について II

1. 位相空間の粒子分布の変化



縦方向位相空間: (左)加速直後周回前、(右) 周回後・減速直前 スケールは同じ。スケーリングの都合で中心がずれている。

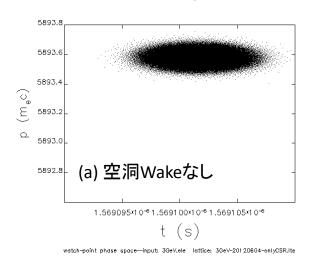
2. 曲率半径10mのケースと比較

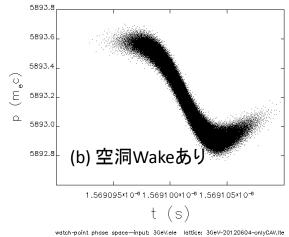
曲率半径による大きな差はなかった

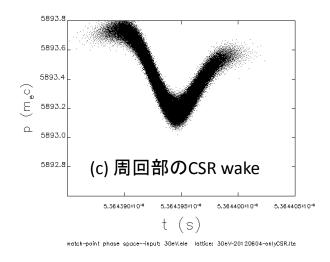
Longitudinal wake

RF curvatureの影響を除くため、RF周波数を1.3kHzとした。 加速直後の $\Delta \sigma_{\delta}$ および $\Delta \delta$ を計算した。

初期值: $(\epsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10MeV, Q, \sigma_{z}) = (1 \times 1e-7, 2 \times 1e-3, 77pC, 2 ps)$







Wakeによる縦方向位相空間

(a): 3GeV加速直後、空洞wakeなし、(b): 3GeV加速直後、空洞wakeあり (c): 周回後・減速前、空洞wakeなし、CSR wakeあり、(CSRDRIFT込み)

1. 空洞の縦方向のwakeによるenergy spread増加

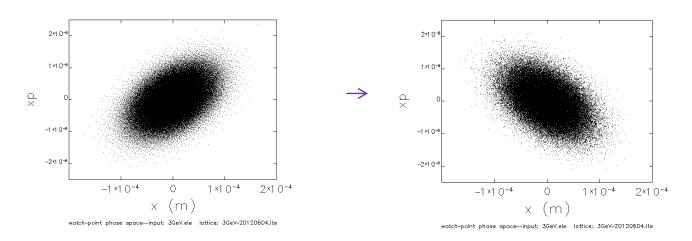
 $\Delta \sigma_{\delta}$ 3.5 x 1e-5 (0.66 x 1e-5 → 3.6 x 1e-5) $\Delta E/E_{0}$ (= $\Delta \delta$) - 6.7 x 1e-5

 $\Delta\sigma_{\delta}$ および $\Delta E/E_{0}$ は放射励起・CSR wakeより大きい。

Ultimate mode I

初期値: $(\epsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10MeV, Q, \sigma_{z})$ = $(1 \times 1e-7, 2 \times 1e-3, 77pC, 2 ps)$ 放射励起の影響・RF curvatureの影響を含めて、synch_rad=1, ISR=1、RF周波数を1.3GHzに戻した。 直線部に流れるCSR wakeについて評価したが、遮蔽効果は考慮していない。

1. Emittanceの変化

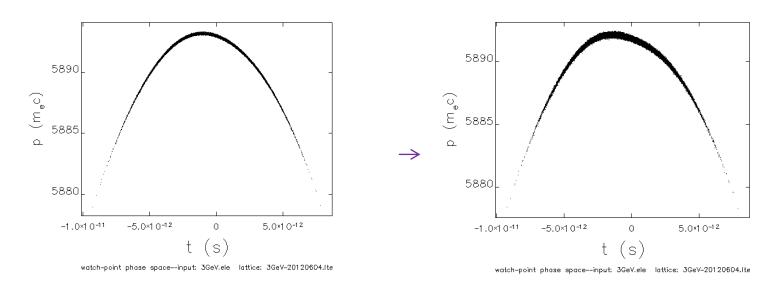


水平方向位相空間: (左)加速直後周回前、(右)周回直後減速直前スケールは等しい。β関数はほぼ同じ、αの符号は逆である。

$$\Delta \epsilon_{\rm x} [{\rm mrad}]$$
 3.0 x 1e-12 (1.699 x 1e-11 \rightarrow 1.725 x 1e-11) ($\Delta \epsilon_{\rm x1} = {\rm sqrt}(\epsilon_{\rm x1}^2 - \epsilon_{\rm x2}^2)$ と定義)

 \checkmark $\Delta ε_x$ は放射励起のみの計算結果に近く、CSR wakeによるものはほとんど無いと考えられる。

Ultimate mode II



縦方向位相空間: (左)加速直後・周回前、(右) 周回直後減速直前 スケールは等しい。スケーリングの都合で中心がずれている。

$$\Delta \sigma_{\delta}$$
 -7.0 x 1e-5 (1.867 x 1e-4 \Rightarrow 1.731 x 1e-4)

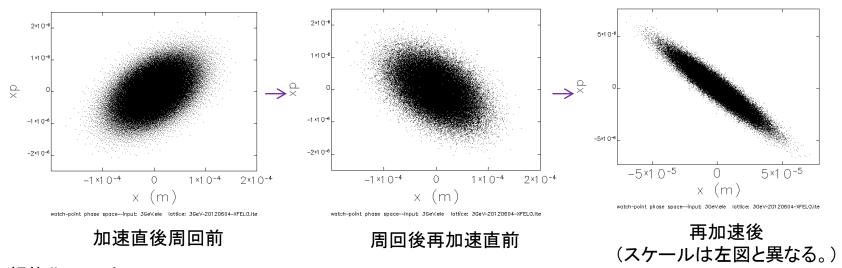
 $\Delta E/E_0$ -1.6 x 1e-4

- \checkmark CSR wakeによってRF curveの中心が押しつぶされ、全体の σ_{δ} は下がる傾向。
- ✓ スライスのσ₈は放射励起によって増加する。

XFELO mode I (Case A)

初期値: $(\epsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10$ MeV, Q, $\sigma_z)$ = $(1 \times 1e-7, 2 \times 1e-3, 20 pC, 1 ps)$ 放射励起の影響・RF curvatureの影響を含めて、synch_rad=1, ISR=1, RF周波数を1.3GHzに戻した。直線部に流れるCSR wakeについて評価したが、遮蔽効果は考慮していない。

1. Emittanceの変化



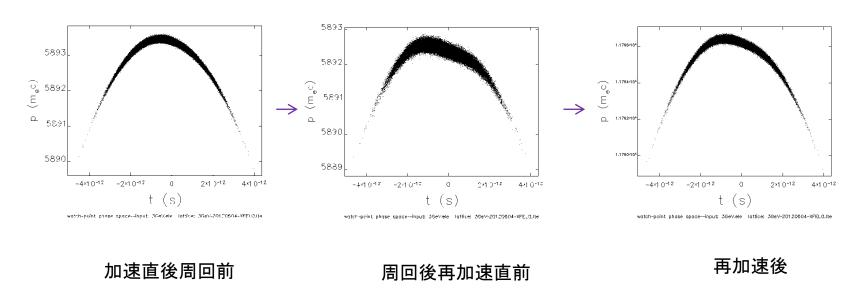
規格化エミッタンスε_{nx}

 ϵ_{nx} : 1.001 x 1e-7 [mrad] ϵ_{nx} : 1.015 x 1e-7 [mrad] ϵ_{nx} : 1.015 x 1e-7 [mrad]

- ✓ 規格化エミッタンス0.1 mm-mradは1%程度の精度で維持可能である。
- ✓ 周回前後(3GeV)の $\Delta \varepsilon_x$ はおよそ2.8 x 1e-12であり、放射励起のみの計算結果に近く、CSR wakeの影響は見られない。

XFELO mode II (Case A)

2. Energy spreadの変化



 $σ_δ$: 4.799 x 1e-5 [mrad] $σ_δ$: 4.341 x 1e-5 [mrad] $σ_δ$: 4.390 x 1e-5 [mrad]

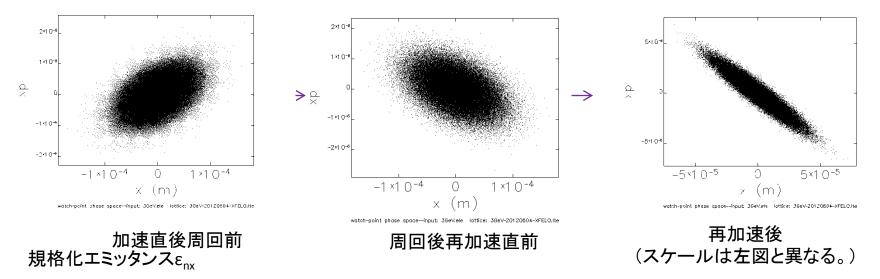
- ✓ XFELOの発振に必要な5 x 1e-5は維持可能。
- ✓ 周回後はCSR wakeの影響でσ_δが小さくなる。
- 平加速の前後でσ_δに大きな変化は無く、ほぼRF curvatureで決まっている。

XFELO mode I (Case B)

新しい電子ビームの条件が提示されたので検討

初期值: $(\epsilon_{nx}, \sigma_{\delta}@10 \text{MeV}, Q, \sigma_{s}) = (1 \times 1e-7, 2 \times 1e-3, 7.7 \text{ pC}, 0.38 \text{ ps})$ 放射励起の影響・RF curvatureの影響を含めて、synch rad=1, ISR=1, RF周波数を1.3GHzに戻した。 直線部に流れるCSR wakeについて評価したが、遮蔽効果は考慮していない。

1. Emittanceの変化



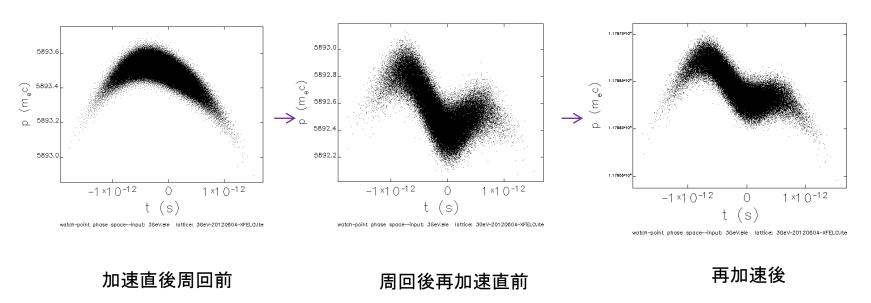
 ϵ_{nx} : 1.001 x 1e-7 [mrad] ϵ_{nx} : 1.015 x 1e-7 [mrad]

 ϵ_{nv} : 1.015 x 1e-7 [mrad]

- ✓ 規格化エミッタンス0.1 mm-mradは1%程度の精度で維持可能である。
- ✓ Case Aと同様に、放射励起のみの計算結果に近く、CSR wakeの影響は 見られない。

XFELO mode II (Case B)

2. Energy spreadの変化



 $σ_δ$: 1.105 x 1e-5 [mrad] $σ_δ$: 2.771 x 1e-5 [mrad] $σ_δ$: 1.496 x 1e-5 [mrad]

- ✓ Case Aに比べて、エネルギー広がりは小さくなる。
 - ✓ バンチ長が小さいため、RF curveの影響が小さい。
 - ✓ CSR wakeがRF curveを補正するように働く。
 - ✓ Transientの長さはおよそ1m。(Case Aでは1.7m)

まとめ

- 3 GeV ERLのエミッタンス増加やエネルギー広がりを原因毎に評価した。
 - 放射励起
 - $\Delta \sigma_{\delta}$ は解析解と一致した。 $\Delta \varepsilon_{\star}$ は定義について検討が必要である。
 - CSR wake
 - DRIFTに流れるCSRwakeを考慮すると、Δσ_δが数倍に増加した。
 - Δε_xの増加は計算誤差以下であった。
 - 遮蔽効果を入れていないので、今後考慮する必要がある。
 - 空洞の縦方向のwake
 - $\Delta\sigma_{\delta}$ は放射励起やCSR wakeよりも大きかったが、Off crest加速などで対処出来そうである。
 - 仮にTESLA空洞のwake functionで計算しているため、今後ERL空洞に更新する必要がある。
- 現実的なultimate modeやXFELO modeのパラメータで評価した。
 - エミッタンス増加は放射励起の解析解とほぼ一致し、CSR wakeの影響はほとんどないと思われる。
 - σ_δの主な原因はRF curvatureであるが、XFELOのCase BではCSR wakeの影響も見られる。
 - CSR wakeによってRF curveの中心が押し下げられてσ_δが減少する。
 - スライスσ_δは放射励起によって増加する。
 - XFELOでは発振に必要な0.1 mm-mradの低エミッタンスや5 x 1e-5の低いエネルギー広がりを 維持できる見込み。